

デンマークの福祉における余暇の思想

—フォルケホイスコーレと生活指導教員養成大学の活動をとおして—

鈴木 七美

要 約

デンマークに特徴的な余暇活動は、神学者・歴史家のグルントヴィに率いられた19世紀の民衆運動と農民教育を源流とし、現在は、立ち止まりや学び直しの機会を提供すると同時に、個々人を地域に結びつけ市民として生かす戦略の役割を果たしている。本稿では、余暇活動の実践にユニークな役割を果たしてきた「人生の学校」とも呼ばれるフォルケホイスコーレ、コーディネーターであるペダゴウを養成する生活指導教員養成大学に関する現地調査をとおして、余暇とライフスタイルの可能性について考察を深める。

キーワード：余暇活動、デンマーク、生活の質、フォルケホイスコーレ、生活指導教員

はじめに

「2005年世界幸福度調査」で1位と発表されたデンマークは、最近、少子化傾向が改善されていることでも注目されている[澤渡ブラント 2005: 5-6; 青木 2004; 西岡 2004: 1; クヌズセン 1999: 3; 湯沢編著 2001: 24-29]。社会福祉国家として知られるデンマークに関する書籍も次々と出版されてきた。福祉の充実は、高い税金に支えられているという。収入の約50%が所得税で消費税率は25%にものぼる。だが、年金の平均金額は月々18万円で、障害者は20～23万円支給されており、治療費も基本的に無料で、少子高齢化という状況でも高齢者は生活の心配はないといわれている。子どもに関しても、教育費はほとんどかからない。まさに、ゆりかごから墓場まで、1人1人が、不足なく生きてゆけるようなプログラムを目指して、第一次世界大戦敗北後、「平等」²という観点から社会政策が推進されてきた。様々なサービスを利用する人々が、自らの必要性や構想を発信する「ユーザー・デモクラシー」というシステムも鍊

磨されてきた[浅野他 2005]。

英語では“welfare”あるいは“well-being”と表現される「福祉」という語は、14世紀以来「善き生（good living）」を意味するものとして使われてきた。それは、人々や共同体や事物が善く快適な状態にある、“well-being”を構想するものである。ドイツ語で「福祉」を意味する“Wohl”の場合も同様に「善い（gut）」状態を意味するが、この語はさらに「幸福・安寧・福利・健康」や「全体」という、身心の心地よさを総体として捉える響きをもつ[寺崎 2000: 42-43]。いずれにせよ「福祉」という語の原義は、社会における「弱者」のみを念頭に組織されるものではなく、すべての人々が生きるにあたって心地よさを求める活動の総体を指すものである。それは生きる目的の一つとしても措定されよう³。

デンマークにおける福祉を考えてみると、子どもから大人まで様々な人々のニーズを掬い上げつつ、生活の基盤を整えることによって、1人1人がそれぞれの暮らしをデザインできるような工夫が凝らされている。なかでも特徴的なのは、「余暇活動」が重視されていることである。デンマークを訪れると、北欧にあって、貴重な太陽の光を休

日のみならず毎日楽しむことができること、これが働いているすべての人々に与えられることが人々の一大関心事なのだと感じられる。人々はまだ明るいうちに仕事を終えて、自分の時間を過ごすことがまずは基本だと考えられているようだ。「幸福」は生活における安心のみならず、「時間」からも生み出される。

実際、労働者の法定労働時間は、1974年41時間から40時間に、さらに1990年には37時間に短縮された。残業という労働文化はない。フレックス制を導入している職場もあり、早朝出勤して夕方3時から4時に帰宅する人も多い。百貨店などのスタッフを別として、民間企業、公共団体の全てが週休二日制で、土・日が休日である[澤渡ブ兰特 2005: 73-74]。こうした時間的余裕が、デンマークに特徴的な余暇活動を可能としているともいえる。

余暇は家で過ごすことばかりではなく、様々な活動のヴァリエーションが具体的に設定されている。たとえば、余暇活動の場の一つとして誰にでも開かれているフォルケホイスコーレという学舎は、立ち止まりや学び直しを考える人々を迎えるデンマークに特徴的な空間である。学校を意味する“school”は、ギリシア語のスコレー (scholē) に由来するが、このスコレーは「余暇」を意味するという。「スコレー」は、生産活動から解放された時間のことであり、生産の余剰によってはじめて実現される自由な時空間なのである。学校は人を自由にするのだ[寺崎・周 2006: 37]。入学試験も卒業試験もなく、生産できる者になることを目的に追い立てられることなく、ただ居ることも許されるフォルケホイスコーレにおいて最も重視されているのは、人間性を養うことである。

すべての人々に余暇活動の機会が用意されるにあたって、余暇活動の場と共に不可欠なのは、余暇を支える人々の存在だ。多くの場合、ボランティアではなく様々な仕事に就いた人々が互いに余暇を生み出すよう活動する形が模索されてきた。なかでもデンマークでしばしば話題にのぼるは「ペダゴウ (pædagog)」と呼ばれる人々だ。彼らは生活指導教員養成大学で養成され、施設や人々の家々を縦横無尽に行き交

い子どもから大人までの余暇活動を支え、それぞれが心地よい生活を実現するために必要な条件を整える役割を果たしてきた。福祉や介護の現場に不可欠の人材を供給する生活指導教員養成大学は、実社会で経験を積んだ者が再び学ぶ場所でもある。

本稿では、余暇活動や余暇を支える人々のありかたを現地調査に基づいて検討したい。デンマークの社会福祉や生活の様相は近年様々な媒体によって報告されてきたが、「余暇」との関係や、余暇を支える要素として、フォルケホイスコーレ、生活指導教員養成大学に注目した研究はみられない。デンマークの教育と余暇活動の状況を調査することから、生きてゆくことを念頭において、どのような教育、あるいは立ち止まり、余暇があり得るのかを考察する。1. では余暇をめぐる思想とその変容を辿り、2. では余暇活動の実践を検討し、3. では余暇活動に不可欠である教育機関について考察する。資料として、フォルケホイスコーレ (Nordfyns Folkehøjskole (日欧文化交流学院 Danish Japanese Culture College) ボーゲンセ 2005年8月、2006年11月～12月)、生活指導教員養成大学 (HOVEDSTADENS PÆDAGOGSEMINARIUM Vanløse 2006年9月)、幼稚園 (Vanløse 2006年9月)、スピアヴィッペン幼稚園、北フュン高等学校、知的障害者施設 (Otterupgården)、フュン生活指導教員養成大学、アイビュー自治体、高齢者施設、高齢者委員会 (オーデンセ、ボーゲンセ 2006年11月～12月) において、参与観察、インタビューによる研究調査で得られたデータを用いる⁵。

1. 余暇活動の思想

デンマークの余暇活動は、およそすべての人々、すなわち子どもから高齢者までを対象に構想されている。それは、「資源としての人間」の能力を引き出すということをも念頭に進められている。成人の学習活動への参加は年間150万人とされ(1996年)、青少年の2/3が一つ以上の組織活動に参加しているといわれている[湯沢編著 2001: 178; Danish Ministry of Education 2005]。学習塾や学校での部活動はない。余

暇活動の思想あるいは自己教育についての考え方は、デンマークの歴史のなかで生まれてきた、デンマークに特徴的なものである。

1) グルントヴィの思想とフォルケホイスコーレ

余暇活動の歴史は「フォルケオプリュスニン」(folkeoplysning)に遡る。フォルケオプリュスニンは、定型教育に属さない教育や学習方法をいう。フォルケ(国民、民族)のオプリュスニン(啓蒙、情報)という意味で、19世紀の宗教的・社会的運動に起源をもつ⁶。1830年代ヨーロッパ中部の革命運動の波を受け、知識人、中産階級のあいだでは自由主義運動が興隆し、封建的階級差別是正や下層農民の生活改善が主張されていた。

N・F・S・グルントヴィ(1783-1872)は、哲学者、詩人、教育者、聖職者であったが、19世紀半ばのデンマークにおいて、農村と都市の格差拡大、農村の疲弊を憂慮し、この状況を打破する方策として農村の活性化を構想した。そのためには、農村に住む人々が、自分の土地で仕事をしながら集い学ぶ機会をつくっていかねばならないと、彼は考えた。

グルントヴィの発想は、豊かな暮らしや人々の相互作用についての彼の考え方と深く関連している。今でもデンマークの人々によく愛唱されている詩歌の一つのなかで、グルントヴィは次のようにうたっている[橋本編 2004: 198]。

人生は、平凡で楽しく暮らし、働く生活がよい。
このような生活は、王の生活と交換できない。
年老いた者たちと一緒に、素朴で楽しい生活がよい。

王宮の中も、あばら屋の中も、同じように素晴らしい。(『国民唱歌集』第17版、463番)

日々の暮らしをまっとうしながら周囲と調和してゆくことが、個人の充足、さらには人々が安心して暮らせる社会形成にとって重要だという信念が表現されている。

広義の理性は民衆自身に内在するという考え方から、教師や啓蒙者はヘルパーであり、民衆が互いに刺激しあい語りあうことが重視されて

いた[コック 2004:138]。人々が対話を通じて、人間の生の不可思議さや尊厳を知り、力を合わせて生きることによって覚醒することはグルントヴィの願いであった。

グルントヴィの思想は、クリスティン・コル(1816-1870)によって国民高等学校として具体化され、農村青年たちの学びの場が構想された。シュレスヴィヒ公国領をめぐるドイツとの戦争を経験した19世紀には国民意識、愛国心が自覚され表現されるようになり、青年たちの社会的関心に答える機会が重視されたといわれる[湯沢編著 2001: 179]。

150年以上の歴史をもつこのデンマーク独特の学校、フォルケホイスコーレ(folkehøjskoler 国民高等学校)は、現在、デンマーク国内や一部ノルウェーに限ってだけでも約100校ある⁷。「人生の学校」と呼ばれる学校は全寮制で、基礎知識を習得する専門学校とは異なり、入学・修了試験や成績表もなく、教師や仲間との会話や生活をととして「全体としての生“life as a whole”」について思い巡らす場所となっている。フォルケホイスコーレは、国家の方針から自由で干渉を受けず、それぞれ特徴を有し、学校ごとに科目は様々である。だが経費の約8割は、行政からの援助でまかなわれている。成人を対象とし、17.5歳以上なら誰でも入学できる。一般に数ヶ月が1タームを構成している。

2) 余暇活動の変容と社会政策的役割

余暇活動の場は、フォルケホイスコーレばかりではない。20世紀に入り、交通の便もよくなり人々の移動や交流が容易になると、余暇活動は、都市から遠方にあった農村のみを念頭におく必要はなくなった。1960年代後半以降、デンマークがEUに加盟し、行政単位の再編に伴い地域の解体が進むにつれて、国民観念の醸成よりもむしろ地域社会の形成が課題として浮上した。1950年代以降、女性の就業率が高まり、とりわけ都市において高齢者が孤立せず、子どもたちにも十分に目の届くような地域社会のありかたが模索されるようになった。

デンマークでは、もともと親子三世代が同居することはまれで、子どもは18歳を過ぎると独

立して自分の住居を構える。だからといって、親と子が疎遠というわけではなく、近くに住んでしばしば会って食事を共にする頻度は比較的高い。このように、もともと核家族で居住する傾向のあるデンマークにおいては、家族のメンバーだけで支え合うのではなく、地域を基盤として助け合うシステムを組織することによって、誰もが一生をつうじて安心して暮らせる社会の構想が必要と認識され、すべての年代の人々における自発性と共同性の強化が目指されるようになった。労働時間を37時間に押さえ、ワークシェアリングを取り入れ、すべての人々がその人の能力をもって社会に繋がることによって、構成員を支えるという構想が創られていった。

子どもたちの余暇活動として、保育所、学童保育所、余暇クラブ、青少年クラブ活動などが実践されてきた。失業者にも学ぶ機会を与え、大人も学び直しの余裕をもつ。高齢者の活動の可能性も広げてゆくことが目指された。1990年には「余暇活動支援に関する法」によって、「イヴニング・スクール」が全ての自治体で制度化され、1996年には4億260万Kr（約60億3900万円）が投入された〔湯沢編著 2001: 181〕。これは、就業する時間以外に、楽しむことや学び直しのために設定された公的助成である。

余暇活動の社会政策的役割として、青少年に関しては、通常の学校以外に、地域に根ざした活動を行う場を設定することにより、非行・犯罪防止対策という面がみられる。失業者に対しては、1990年代「積極的労働市場政策」として、失業手当の受給条件として学習活動への参加が求められるようになった。「非寄宿制学校」を拠点として、地域の失業者を把握し、彼らが労働市場、教育システムに参加できる状態を保持できることが目的である。1980年代以降、施設利用から在宅への移行を含め大きく転換した高齢者福祉対策においては、高齢者をケアの対象として捉えるのではなく、自己資源（残存能力）を活用することが謳われた。「デイセンター」は、自宅で生活する高齢者が、地域の人々と交流し様々な活動を行う場である。そして、民間全寮制教育機関としての「寄宿制

学校」は、かつてのフォルケホイスコーレとは異なり、農民のみならず様々な人々を対象に、立ち止まり考える時と場を提供するようになった。余暇活動は、個人化した社会に適合するミーティングポイント作りという新たな機能をもつことになったのである。

2. 余暇活動と福祉の現状

デンマークが福祉大国といわれる要素として、子育て支援、医療の充実、障害者福祉、高齢者のケアなど、人々が生まれてから死ぬまで安心して過ごせる様々なケアが工夫されていることがあげられる。それは、衛生や防犯といった領域にいたるまで行き渡っている。それらの実践には、余暇活動が密接に関わっている。その様相を検討してみよう。

1) 保育の場

1970年代以降、女性の就業率の増加に伴い、子どもたちの生活空間が、家庭から保育施設に移行した。1970年代半ばまでは、半日勤務が多かった女性をカバーする目的で半日保育園が存在した。その後、半日勤務では納税後のメリットがないこともありフルタイム勤務が求められ、子どもたちの生活も1日保育施設に移行した。国民学校（公立小中学校）の子どもたちが放課後に生活する学童保育所も、1970年代後半までは利用する子どもが少なかったが、1980年代半ばにはほとんどの児童が利用するようになった〔澤渡ブラント 2005: 66-67〕。学童保育所のように、正規の教育機関で過ごす以外の時間も、たんに両親が帰るのを待つというのではなく、子どもたちの生活に意味のある余暇として構想されている⁸。

3歳から4歳までの幼児は、通常幼稚園に通う。公立学校の多くには幼稚園が併設されており、幼・小・中の一貫教育がなされている。デンマークの90%の子どもたちは幼稚園に行く。目的は、「社会性」と「自立心」を醸成することが一番にあげられている。さらに、新しい様々な文化に触れることも重視されている。義務教育ではないので、年間にかかる費用の20%（年間2000KR程度）を親が負担している。それぞれの幼稚園独自

の活動が展開されているところに特徴がある。

フュン島北部のスピアヴィッペン幼稚園では、「自然」と触れさせることが重視されていた。広大な敷地の中で、山羊などの動物を飼い、畑を作り、子どもたちは泥だらけになって過ごす。一年に一度豚を殺し皆で食べるが、これは肉を食べることは動物を殺すことと関連していることを知る重要な機会でもある。

開園時間は午前6時から午後5時、金曜日のみ午後4時までとなっている。朝食（6時～8時30分）、昼食（11時30分）、間食（14時）とおよその時間は決まっているが、それぞれ自分で調子を見て自由に食べてよい。活動も自由である。60人の子どもたちに対し職員は19人おり、1週間に1人の子どもと対面する時間が6時間程度という目が行き届きやすいシステムも、園児の自由な活動を可能にしている。

生活指導教員養成大学で学んだ幼稚園の教員やペダゴウの細やかな観察と子供への関わりによって、それぞれの家庭内で誰にも知られずに子どもが暴力を受けることは起こりにくいという。余暇活動と生活指導教員養成大学で学んだ指導員の組み合わせによって、それぞれの家庭が社会に開かれる形をとりやすくなっているといえよう。

2) 青少年の余暇活動

青少年に関しては、義務教育は通常9年間で0年生から9年生までである。とはいえ、デンマークにおいては、青少年の教育は一つの施設内に留まるものではない。第一に、「大人は子どもの教育を行う義務がある」が、それは必ずしも義務教育機関に通わせることではない。希望するならば、親は子どもを学校に通わせず子どもの教育に関し自分でプログラムすることもできる。

0年生は幼稚園クラスである。1年生から6年生までは日本の小学校教育にあたり、1から3年生を低学年、4～6年生を高学年と呼んでいる。7～9年生は中学生である。どの学級も人数が20人程度と少なく、コンピュータ等の機器を活用した個別指導に力が入れている。7年生になるまで学校での試験はない。9年生で卒業試験を受ける。これは高校進学に関わるので、卒業レベルに達して

いない場合には、義務教育ではないが10年目の勉強をすることもある。普通高校（公立235、私立21（85%が公的補助金））進学者は35%程度だが、国民学校卒業後すぐに進学するとは限らないので、高校生の年齢は一樣ではなく幅がある。

学期は2学期制で、月曜日から金曜日までの週5日制も1970年代には導入された。出席は92%程度要求されるが、親から届け出があれば、1ヶ月程度休むことも、「社会勉強」として認められる[澤渡ブラント 2005: 71-72]。義務教育期間であっても、子どもの過ごし方や余暇は多様なヴァリエーションに開かれているといえよう。

基本的に大学入試はなく、高校の卒業試験の平均点や、兵役、労働奉仕などで加算されたポイントなどが大学進学のための資料となる。青少年にとって余暇活動は、将来設計をする時間と場として機能している。大学、専門高等教育機関は全て公立で無料であり、SUと呼ばれる返済義務のない学生奨学金も18歳以上の学生は受けられるので、大学や専門高等教育を受けるにあたって、自分の希望や適性などを熟慮する余裕が生まれる。

課外活動の場として、6歳から9歳までの学童保育所や、10歳から18歳までの青少年が夕刻から自由に過ごせる「余暇クラブ」「青少年クラブ」がある。学童保育所は、一般に家族が就業していて家に帰っても人がいない場合に利用されている。ここには、生活指導教員養成大学で学んだペダゴウがあり、子どもたちの活動を見守る。子どもの過ごし方はとくに決まっておらず、各々の好みに応じて過ごす。宿題や成績表も低学年のうちは通常はない。

余暇クラブは、10-14歳までの子どもたちが中心で、放課後の学校施設などを利用して、週に数度活動する。クラブごとに、活動テーマが設けられている場合もあり、また少年たちの希望やアイデアが採用されることもある。ここにも、ペダゴウがあり、必要な場合には助言を与える。クラブは、住居の近隣に設けられており、どの子どもにとっても通いやすく集まりやすい場所にある[澤渡ブラント 2005: 74]。さらに14-18歳の者たちは、「青少年クラブ」で活動する。

青少年の場合も、余暇活動を含め多様な活動が可能で、同年のみならず様々な年齢層の人々と接することにより、進路などについても考える材料が豊かに与えられるという。青少年の問題に関しても、幼児と同様に各家庭における問題が知られずに終わることはほとんどなく、問題とされれば早いうちに対処されることになる。

3) 高齢者の余暇と高齢者委員会の役割

① 高齢者施設から住居居住へ

デンマークでは、高齢者のケアに関する考え方は歴史的変化を遂げてきた。1970年代までは「老人＝病人」とみなされ、郊外に高齢者用に大規模な施設を建設し、そこに高齢者を集め専門職者による手厚いケアを与えようとしていた。だが、1980年代には1970年代のオイルショックなどから財政難に陥り、特別養護施設を建設せず在宅介護を行う方向を模索した。高齢者自らがそれぞれの生活を構想することが、生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）の高い老後を送ることに繋がるという観点も示された。これらを実行するために、継続性、自己資源の開発、自己決定の三つが掲げられた。

近年、高齢者が自ら組織するアパートメントの集合の形をとるグループホーム形式、治療を含む支援が日常的に必要な人々のためのケア施設などが展開されている。24時間のケア体制をとっている施設でも、共同スペースが設けられたうえ、高齢者はそれぞれ独立型の住居を有するよう配慮されている。

ボーゲンセにあるこのタイプの高齢者施設、アイエボー・プライアセンター（Egebo Plejecenter）も、以前はプライエム（特別養護老人ホーム）と呼ばれていたが、現在はプライアセンターに改名されている。建設されてまだ2年半の新しいセンターは、個人の家にさらに共同生活の場が広がったというつくりである。実際に利用者は「住人」と呼ばれている。現在は44人の高齢者が、平屋5棟に8～9人ずつそれぞれの住宅に住んでいる。従業員は55人である。軽度の障害を持つ住人が多く、平均年齢は80歳で、70歳を超えている人がほとんどであり、最高年齢は98歳である。皆ナースコールを首から下げ

ており、緊急時には助けを呼ぶことになっている。

アイエボー・プライアセンターのような24時間体制のところでも、高齢者たちは比較的活動的に見える。「延命」についての捉え方がデンマークにおいては特徴があり⁹、寝たきりという状態の高齢者はそう多くないという。

デンマークでは、通常18歳を過ぎると子どもが親と別に住み始め、親子同居のケースはまれである。上記のケア付き高齢者用住居（高齢者センター）では、夫婦であっても別の住居に暮らす者もいた。「部屋に一人で居て寂しくないか？」、「娘や息子と同居したいと思わないか？」と質問すると、「全く寂しくない。いつも誰かが部屋を訪れてくれるから。」という答えや「子供と同居したいとは思わない。人数が増えるとその分喧嘩が起きる。」などという答えがほとんどの場合返ってくる。

こうした居住パターンにおいて、高齢者が余暇活動として自らの生活をデザインすることは不可欠である。

② 余暇活動

どんな高齢者でも、それぞれの能力を生かす（自己資源の開発）という観点から、様々な活動が推奨されている。介護士が常駐している住居でも、行動力や生活への意識を衰えさせないように、自分でできることは行うよう推奨されている。

アイエボー・プライアセンターでのキーワードとして、「アクティブ」「環境に密着する」があげられている。住宅にはキッチン、リビング、寝室、広いトイレが完備し、必要な場合は寝起きや介助を容易にするための補助器具も備えてある。慣れ親しんだ家具を持ち込み、部屋のインテリアを自分の好みにすることもできる。車椅子で移動しても生活しやすいように扉はボタンを押すと自動で開閉するし、調理台の高さも低めになっているなど工夫がみられる。高齢者センターは居心地が良いし今の生活に不満はないと答える人がほとんどだ。

「居心地の良さ」とは何かと問うと、「自己決定が尊重されていること」が第1にあげられ

る。自分で判断して各自のペースで過ごせることが重視されている。食事がサービスされる時間も大まかに決まっていますが、その時間内なら好みの場所で気の向いたときに摂ることができる。共同の場アクティビティルームにもキッチンが備えられ、大きなテーブルで手芸や編み物や、カードゲームを楽しむことができる。自分たちが作った作品を販売する機会ももうけられている。

こうした施設や住居で、生活指導教員養成大学で養成された人々の活動は不可欠である。高齢者にインタビューしてニーズを確認しつつ、イベントのプログラムを作成し、ニュースレターを配布している。その際、外部の様々な年齢層の人々との交流も重視されている。

③高齢者委員会

高齢者の生活や余暇活動を支える特徴的な組織として、1997年、デンマークの全ての地方自治体に高齢者委員会を設置することが定められた。これは各地域に設けられたボランティアから組織される、議会と高齢者の橋渡しの存在ともいえる。委員は無報酬である。高齢者委員会は、高齢者の現状を把握し、高齢者の意見や希望をまとめ、月1回行われる市の議会においていかなる生活を構想するかを提言している。高齢者に助言することもある。仕事の一つとして、年に三回（一回は抜き打ち）高齢者センターの監査に訪れる。委員会は決定権をもたないが、議会での影響力は大きく高齢者の暮らしの向上において不可欠の存在となっている。議会への提言の例として、平屋で横に広い家を建設して欲しい、道路の段差をなくして欲しいなどの要求が挙げられる。

現在、ボーゲンセ市の委員会には7人の委員がいる。委員は議員と同様に4年に一回選出される。60歳以上の市民は選挙権をもち立候補もできる。社会省は年に二回高齢者委員向けの講習会を開いている。

高齢者委員会に関し、高齢者は、ただケアされるだけでなく、自分たちが望む活動がどのような設備・環境・機会において可能かを考えて、希望を出す。年1回の会議では、委員会のある市のす

べての高齢者が参加する会議も行われる。

このようにして、組織される活動の一つに高齢者の余暇活動と位置づけられているものもある。それらは、ヴァリエーションがあるが、あくまでも高齢者の希望に添いつつ、高齢者委員会などの調整を通して、地域において能力を生かす方向が模索されている。高齢者委員の1人、イディツ・ラシモス氏のクオリティ・オブ・ライフは、まさに、余暇活動として高齢者委員会で働くことだという。

4) 失業者と余暇活動

余暇といえば、楽しいなごみの時間を想像するかもしれないが、失業者の場合に設定されているのは、準備学習としての余暇活動である。デンマークでは、ワークシェアリングを推進し、失業者が多くならないように調整が試みられている。そのうえで、失業者には、必要なタイプの職につけるよう、技術などを学ぶことが推奨されている。失業者は、生活の心配のない十分な保険を手にすることができるが、その条件として学びの実践がある。

このシステムによって、失業者の状況を把握し、就業に導く可能性が高まっているという。これも失業者の余暇活動として提示されており、人々はここでも余暇を通じて、社会の一員としての活動を行うしくみが構築されているともいえよう。

5) 立ち止まりと学び直し

デンマークの教育制度の特徴の一つは、いったん休んだり仕事に就いたりしていても、学び直すことや異なる領域を学び始めることが容易であるシステムを工夫していることである。様々な経験をしていることが人間の全体性を豊かにするという考え方がしばしば言及され、大学の入学に際しても、働いたことがあることや旅をしたことなどが評価される。

余暇の思想の歴史において、余暇活動の一端を担うものとして構想された国民高等学校（フォルケホイスコーレ）は、そうした人々が立ち止まり新しい可能性を模索する拠り所として、現在も重要だ。

フォルケホイスコーレは、単位を取得し卒業するという学校ではない。いわゆる資格に結びつくわけではない。したがって試験も存在しない。それぞれの学校が特徴的なプログラムを提示しており、それらを学ぶ期間もある程度設定している。だが、どの年齢層の人であれ、自分がしてみたいことや触れてみたいことがあれば、望む期間そこに滞在することが可能である。国民高等学校のいまひとつの特徴は、全寮制であることで、寮生の活動として三食を共にすること、ゆったり語りあうことが推奨されている。

フォルケホイスコーレの存在は、立ち止まりたいとき、休みたいとき、ほんやりしたいとき、自分の途について考えたいときなど、挫折感やあせりを感じずに過ごせることが当然と認識されていることを伺わせる。失業している場合でも、自ら学費を払ってフォルケホイスコーレに滞在するという選択もありうる。ここにおける余暇活動において、人々はゆるやかに社会と繋がっている感覚を保つことができるとみられる。

以上、子どもから高齢者まで、すべての年齢層の人々、様々な立場にある人々が関わる余暇活動の概要と特徴について記述してきた。

以下では、余暇活動の実践を支える人々を養成する生活指導教員養成大学、および、余暇の思想を人々に伝える役割を果たしてきたフォルケホイスコーレについて、現地調査結果にもとづき検討したい。

3. 生活指導教員養成大学と フォルケホイスコーレ

1) 生活指導教員養成大学

デンマークの大学の数や種類は多くない。医学部、文学部、教師になるための学科などが主流だ。そのなかで、生活指導教員養成大学は特徴ある教育機関であり、卒業生の需要も比較的高いとされる。3年半で取得できるペダゴウ(pædagog)という資格をとると、幼稚園、学童保育所、小学校のサポート、精神病院、高齢者施設、養子縁組、家庭への訪問などに関わる自治体の職員として働くことができる。こうした

人々は余暇活動の実践になくてはならない役割を果たしている。

デンマークの子どもたちの90%がなんらかの形で家庭外の施設を利用している(障害をもった子どもたちを含む)¹⁰。その90%の子どもたちを、教育・指導・サポートするのも、生活指導教員養成大学を卒業した人々だ。

フュン生活指導教員養成大学には約800人の学生がいる。半年に1回入学の機会があり、一期におよそ110名が入学する。生活指導教員養成大学の入学資格の特徴として、就職した経験があることがあげられる。たとえば、現在在学中のM氏の場合には、幼稚園の補助教員をした後、より広範な活動をしたいという意志を固めて入学した。K氏の場合には、日本の高等学校を卒業した後、フォルケホイスコーレで過ごししながら勉強して入学した。両親が日本で行っているグループホームの試みを幼い頃から見てきたK氏は、福祉のありかたに関心をもちデンマークの方法について学びたかったからである。K氏は、現在、学童保育所、小学校の補習教室に勤務している。

カリキュラムは、学校の教育方針によって少しずつ異なる。フュン生活指導教員養成大学の場合、入学後2ヶ月で2ヶ月の実習がある。体験が重視され、適正がないと観察された場合、なかなか先に進むことができない。専門科目として、生活社会学、社会学、心理学、保健、栄養学、指導学、選択科目として、音楽、ドラマ、自然学、技術、運動、デンマーク語、音楽、体育、演劇学などがある。

ペダゴウの活動には、社会と個人、社会と各家族が結びつきを深め、各家族や個人が孤立せず、問題があれば共有できるシステムを構築しようとする試みがみられる。たとえば、デンマークで比較的さかんな国際養子縁組をしている家族の問題をすくい上げ、家族が交流する機会を設けたりすることも、この人たちの活動の一環である¹¹。

だが、最近の問題として、福祉予算が削られて、就職先が十分ではなくなったことや指導教員の減少があげられている。また、行政区画が整理され、ローカルから統合への傾向にあり、今まで各地の状況にきめ細かく対処することを

旨としてきた高齢者委員会や自治体の職員の活動は、今後画一化する可能性があるという憂慮されている。公立の施設や組織における画一化傾向とは別に、人々の個別の希望に対応する私立の幼稚園なども増加しつつあり、地域によっては格差の拡大がみられるようになってきているとされる¹²。デンマークの伝統とされてきた平等思想に変化がみられるとも指摘されている。

2) フォルケホイスコーレ

前述したように、余暇活動の一つとも考えられる、立ち止まりや学び直しなどの場所と機会を提供する。誰でも入れるが、中味はそれぞれ特徴をもつ。卒業生は、次のステップへ踏み出してゆく場合や、もとの職場に戻る場合などそれぞれである。フォルケホイスコーレの一つ、日欧文化学院Nordfyns Folkehøjskole (Danish Japanese Culture College) におけるフィールドワークを通して、どのような実践が行われているのかみてみよう。

日欧文化学院は、フュン島北部ボーゲンセ市郊外のハリスレウという集落にあり、1914年に建てられた旧ハリスレウ村の小学校を改築し校舎として利用している。本館には、教室、食堂、厨房、事務室、リビング、テレビ室、学生用居室、共同のトイレ、シャワーなどがある。新館の学生寮には、教室、共同のトイレ、シャワー（車椅子用あり）、ミニキッチンなどがある。学院と敷地内には、学院長が居住することになっており、その他、ゲストハウス、体育室、音楽室、ホビールーム、運動場が設けられている。1997年よりデンマークおよび日本両国から学生を受け入れ、2005年からは知的障害をもつ人々とともに学べる場として注目されている。新しい学生寮も建設され、合計50人の宿泊が可能となった。

ここでは、デンマーク文化、社会福祉の理論を学び、社会福祉施設、教育・医療機関で実習することができる。長期コースは、理論、実践、視察を行う。授業は、社会福祉（デンマークの福祉、教育、医療対策、コミュニケーション論、介護、介護テクニック、介護倫理を含めた職員養成教育）、語学、創作的科目、その他

（デンマークの民主主義、文化、英語、デンマーク語、陶芸、木工、銀細工、ドラマ、スポーツ）などである。対話と実践が重んじられている。教職員はデンマーク人と日本人で、会話は普通高校と同様に主として英語である。短期コースは、社会福祉施設（児童、高齢者、ハンディキャップ）、教育、医療機関における視察、講義を中心とする。

だが最も重視されているのは、授業ではなく、共に生活することである。フォルケホイスコーレは全寮制で、寮生は多くの時間を共に過ごす。学生は、食事の準備や後片付け、職員とともにを行う食器洗い、居室と共同スペースの清掃を行うなど、日常生活における様々な役割を担う。

フォルケホイスコーレは基本的には校長の理念に基づいた私学であり、日欧文化学院の社会福祉コースの滞在費は、12週間分で12000KR（約24万円）である。資格を得ることとは関係なく過ごすこうした学校が存続するには、人々のニーズに適合的であることも必要となる。

デンマークで数少ない日本からの学生を受け入れるこの学院では、多くの日本人が逗留し、それぞれの道を開いてきた。前述のK氏もここを出発点として現在はペダゴグとして活躍している。長年この学院と日本を往復し新聞特派員として世界を歩いてきたZ氏は、2006年についてこの学園の教員として学院の敷地内に家族と共に住み始めた。2006年11月には、日本で介護士を務める人々やこれから日本に帰って社会福祉士を目指して再び大学で勉強を始めるT氏など、今までの生活を振り返り新しい道を模索する日本からの学生や滞在者が生活していた。

様々な理念を掲げたフォルケホイスコーレの存在は、デンマークや国外から集まる人々が何を求めているのかを映し出しているともいえよう。

おわりに

デンマークの余暇の思想は、デンマークの歴史・社会に特徴的なものであり、時代とともに変化してきた。それは、社会政策的側面も色濃くもつものであるが、政府から一方的に提示されるものではなく、「住民」1人1人のニーズや

アイデアを掬いあげるシステムも工夫されてきた。余暇活動は、なによりもすべての人々の一生にわたる「福祉」(“well-being”)という考え方を支える一つの要素となっているといえよう。

「ニート」という言葉がほとんど聞かれないデンマークでは、教育は税金でまかなわれ基本的に無料であるのに、普通高校への進学率は30%台に留まっている。青少年は、様々な学びのヴァリエーションを選択し、生活の糧を得ることを含め早い時期から自らの生活を構想している。こんなデンマークの状況も「余暇」と何らかの関連があるろう。日本では、「ニート」と呼ばれる若者の状況への懸念がしばしば表明されている。「ニート」という語が意味するものも未だ明確ではないが、「ニート」が注目されるのは、若者たちが、学歴社会を生きる以外に道がない、あるいは自らの将来像を描くことのない状態の若者の存在が現代社会の問題を提示しているようにみえるからでもある。

デンマークでは、生活に余裕をもち、余暇のあり方を問うことで、暮らしを考える活動が、絶え間なくなされていることが特徴といえよう。「ユーザー」が主役の「ユーザー・デモクラシー」がどのように可能か、それぞれが主役になって考え実践することを手放さないという姿勢は明確に伝わってくる。一つ一つの試みの積み重ねによって、福祉が実現されるというねばり強さが、そこここで実践されている。

最近の問題として、福祉予算の削減、行政区画の整理などによって、ローカルから統合への傾向が指摘されており、各地でユーザーとして活動してきた人々は危機感を深めている。それぞれの地域で行われてきた活動も、デンマークの平等思想を基盤としてきたとされているが、前述のように教育施設における格差がみられるようにもなったと報告されている。様々な問題点を共有する社会として、今後もデンマークの特徴と問題について現地調査に基づき、日本のそれとの比較を続行したい。

謝 辞

本研究調査に関わり貴重な情報・コメントをいただきましたNordfyns Folkehøjskole 千葉忠夫先生、銭本タカユキ先生、加藤幸夫先生(ペタゴウ)、Fyns Pædagog Seminarium Prof. Mette Fedders, HOVEDSTADENS PÆDAGOGSEMINARIUM Rector, Puk Kejser, Jette Tørning, Department of Educational Anthropology, DANMARKS PÆDAGOGISKE UNIVERSITY Dr. Eva Gulløv, Dr. Ing-Britt Christiansen, Otterapgårten Prof. Bent Laurensen, 高齢者センター (Egebo Plejecenter)、ボーゲンセ市高齢者委員会委員長 Edith Rasmussen. 造形美術家高田ケラー有子氏、および共に現地調査を行い資料を検討してきました京都文教大学文化人類学科2006年度フィールドワーク履修者に感謝いたします。

北欧諸国における余暇活動の歴史と生涯教育・国民高等学校の状況について、コメントや関連資料(伊藤2005および岡沢・宮本1997)など貴重な情報をいただきました京都文教大学人間学部文化人類学科古川まゆみ氏に感謝いたします。

注

- 1 デンマークの合計特殊出生率(2005年)は1.8 [Statistics Denmark 2007]。
- 2 デンマークにおける「平等」の理念は、「同じだけ与えられるのではなく、必要に応じて与えられること」に特徴があるとされる。(フォルケホイスコーレ(Nordfyns Folkehøjskole) 院長千葉忠夫氏の講義「デンマークの民主主義」於日欧文化学院2006年11月28日)
- 3 とはいえ、今日の福祉が、「福祉」の原義を実現してきたわけではない。いわゆる福祉は、最低限の条件すらもが欠けているとみなされる人々の問題として強烈に自覚され、17・18世紀に「ポリス」へ囲い込まれ変質を遂げたとされる [寺崎2000: 43]。
- 4 「学校」の歴史的変容に関し、寺崎・周はこれまでも興味深い分析を蓄積してき

た。たとえば、周は、中国の文献や古文字を手がかりとして、食料保存の場とこれを消費する「蕩尽の場」としての学校について論じている〔寺崎・周 2006: 31-38〕。

- 5 各種施設に関わる人々、デンマークで生活する人々などへのインタビュー調査にもとづく。2006年11月～12月における調査は、京都市文教大学人間学部文化人類学科フィールドワーク実習として行ったものである。〔鈴木他編著 2007〕も参照。
- 6 フォルクオプリュスニン（原語は「フォルケリ・オプリュスニン」(folkelig oplysning)）は、デンマーク特有の文化を示す用語で「民衆的啓蒙」とも訳される。「フォルケリ」は「民衆一体的」という意味で、19世紀には農民のみならず都市労働者も含み「民衆的・国民的」一体性の意味合いをもつにいたったとされる〔コック 2004: 115〕。
- 7 グルントヴィの理念をもとに1844年にユトラント半島南部のレディンで開校され、民衆の教育文化運動として北欧民主主義と深く関連しているとされる〔コック 2004: 119〕。スウェーデンにもデンマークをモデルとした国民高等学校が、90年代半ばにはおよそ130校、2000年代前半には140余校ある〔伊藤 2005: 35; 岡沢・宮本編 1997: 190〕。
- 8 保育施設（デイケア）として、0～2歳児の乳児保育所（Vuggestue）、3～6歳児の幼児保育所（Børnehave）、6～9歳の学童を対象とした学童保育所（Fritidshjem）、国民学校に併設された学童保育施設（Skole Fritidsordninger）、および0～6歳児の統合保育所（Aldersintegrerede institution）がある〔仲村他編 1999: 30-31〕。
- 9 デンマークでは、通常延命措置とされること、すなわち人工呼吸、栄養補給、治療薬投与などは、多くの場合実施されないという（千葉忠夫氏 2007年1月）。
- 10 障害児も保育施設で健常児との統合教育を行うことが基本とされている。重度の障害児のためには特殊施設もある〔仲村他編 1999: 31〕。
- 11 2006年8月のヒレロッド（Hillerød）におけ

る調査では、この問題に深い関心を寄せており経験も有する自治体職員、カウンセラーなどがチームを組んで仕事をしている状況について、インタビューを行った。ヒレロッドでは、自治体の事務所に、国際養子縁組みに関するカウンセリングを受けられる場所が設けられている。

- 12 デンマークの幼児教育について研究を行っているコペンハーゲン教員養成大学のグレウ氏によると、コペンハーゲンの比較的裕福な地域では、私立の幼稚園が増加し、教育内容も、後の高等教育に向けた準備教育がなされるなど、変化がみられるという。こうした動きは、都市のなかで住空間の格差が開くことと連動しているともみられている。

参考文献

青木加奈子

2004「デンマークの合計特殊出生率の動向に関する研究」『家政学研究』Vol. 50 No. 2, 76-82頁。

浅野賢司他

2005『デンマークのユーザー・デモクラシー』新評論。

浅野賢司他編

2006『デンマークの歴史・文化・社会』創元社。
Danish Ministry of Education

2005 *Facts and Figures 2005*.

Gulløv, Eva and Fog, Karen eds.

2003 *Children's Places: cross-cultural perspectives*,
Routledge.

橋本淳編

2004『デンマークの歴史』創元社。

広井良典

1997『ケアを問いなおす』ちくま書房。

伊藤正純

2005「職業教育を重視するスウェーデンの教育理念」『北ヨーロッパ研究』vol. 2, 33-43頁。

Jespersen, Knud J.V.

2004 *A History of Denmark*.

コック、ハル

2004『生活形式の民主主義 デンマーク社会の哲学』小池直人訳、花伝社。

クヌズセン、リズベット B.

1999「デンマークにおける最近の出生率の動向—出生率上昇期の家族政策の影響—」『人口問題研究』55-3, 3-24頁。

Lauritsen, P. W.

2002 *A Short Guide to Christiania*, Aschehoug
Dansk Forlag A/S.

永田佳之

2005『オルタナティブ教育』新評論。

仲村優一他編

1999『世界の社会福祉 デンマーク ノルウェー』
旬報社。

西岡八郎

2004「先進諸国の出生力パターンの比較分析」
『厚生の指標』第51巻第11号、1-9頁。

Nordic Council of Ministers

2004 *The Nordic countries in figures 2004*.

岡沢憲美・宮本太郎編

1997『スウェーデンハンドブック』早稲田大学
出版部。

澤渡ブラント夏代

2005『デンマークの子育て・人育ち』大月書店。

Statistics Denmark

2004 *Befolkningens Bevægelse 2003*.

2005 *Data on Denmark 2005*.

2007 *Denmark in Figures 2007*.

杉本健郎

2000『北欧・北米の医療保障システムと障害児
医療』クリエイツかもがわ。

鈴木七美

2005「柿の葉を摘む暮らし—ノーマライゼーショ
ンを超えて」『文化人類学研究』70/3

2006「医療と文化」綾部恒雄・桑山敬己編『よ
くわかる文化人類学』ミネルヴァ書房。

2006「医療・身体論」綾部恒雄編『文化人類学
20の理論』弘文堂。

鈴木七美他編著

2007『デンマークの社会福祉とコミュニケーショ
ン—フォルクヘイスコーレで暮らして学ぶ』
(フィールドワーク実習報告書) 京都文教大学
人間学部文化人類学科。

高田ケラー有子

2005『平らな国デンマーク』日本放送出版協
会。

寺崎弘昭

2000「福祉・教育・治安」花井信・三上一夫編
『教育の制度と社会』

2004「少子化と教育関係のゆくえ—家族と子ど
もの心性史—」『教育学研究』71/3。

寺崎弘昭・周禅鴻

2006『教育の古層—生を養う—』かわさき市民
アカデミー出版部。

湯沢雍彦編著

2001『少子化をのりこえたデンマーク』朝日新
聞社。

Abstract

Ideas and Practices Concerning “Leisure Activities” in Denmark: Focusing on Activities Carried Out at Folkehøjscole and Pædagog Seminarium

Leisure activities -- a characteristic feature of Denmark - can be traced back to the popular movement and peasant education led by the theologian and historian Gruntvig of the 19th century. At present, such activities give everyone the opportunity to stop and reconsider his or her well-being, as well as to learn things over again. At the same time, it plays the strategic role of allowing everyone to live as an active citizen in his or her local community. In this paper, I will consider the meaning of leisure activities in people's lives by carrying out fieldwork research on two unique educational institutions, the “Folkehøjscole,” or a “school for life” and the “pædagog seminarium.”

Keywords: leisure activities, Denmark, well-being, Folkehøjscole, Pædagog